

## 令和7年度第3回鶴岡市地域コミュニティ活性化推進委員会 会議概要

- 日 時：令和7年12月12日（金曜日）14時30分～16時35分
- 会 場：鶴岡市第三学区コミュニティセンター 大ホール
- 会場出席者：鶴岡市地域コミュニティ活性化推進委員会委員12名
- 市側出席者：市民部長ほか鶴岡市地域コミュニティ活性化推進委員会幹事、事務局21名
- 公開・非公開の別：公開
- 傍聴者の人数：5人

（14時30分 開会）

1 開 会 （全体進行：コミュニティ推進課長）

2 挨 拶 （挨拶：委員長）

3 協 議 （座長：委員長）

（1）第3期鶴岡市地域コミュニティ推進計画（素案からの修正）について

（事務局）資料 No.1、No.2、No.3を説明

（A 委員）

地域コミュニティ支援アドバイザーについて伺いたい。市職員のアドバイザー職員制度とは違うのか。

（事務局）

地域コミュニティ支援アドバイザーは山形県で実施している事業になる。資料3には、支援アドバイザーとして登録されている方々の主な所属組織や支援可能なプログラム等が記載されており、アドバイザーが地域に出向き事業を行うものである。

市の事業であるアドバイザー職員制度は、市職員が地域の要請に応じて派遣され、地域と一緒に活動していくというものになる。

（B 委員）

地域コミュニティの現状を説明するために人口の推移を記載しているが、鶴岡市の高齢化率を伺いたい。

また、市街地のコミュニティ組織協議会、郊外地の自治振興会連絡協議会、広域コミュニティ組織と単位自治組織の違いについて伺いたい。組織の長を区長と呼ぶ地域もあり、呼称がまちまちなので将来的には統一したほうがよいと思う。

今回見直した推進計画では各地域の現状を述べているが、合併20周年を迎えたこともあり、一括した表現にしても良いと思う。第3期計画の案はすでに事務局でまとめているので、5年後に見直しする際は各地域の記載は不要かと思う。鶴岡市全体として簡潔にまとめ、特殊な事情があれば文章で地域について表現してよいと思う。

（幹事）

令和7年4月末の鶴岡市の65歳以上高齢者の総人口に占める割合は、37.13%となっている。

(事務局)

鶴岡地域には 21 コミセンがあり、市街地の連絡組織としてコミュニティ組織連絡協議会、斎地区から西郷地区の連絡組織として鶴岡市自治振興会連絡協議会がある。生涯学習、福祉、防災の役割を担っている。

合併して 20 年が過ぎたことから、計画を一本化したかどうかという意見については、課題が似ていても地域ごとの現状や取組方法が違うため地域ごとの計画とすることとした。

(A 委員)

各地域の計画や取組内容について共通する悩みや課題が多くあると思う。その一方で、それぞれ歴史が異なるため、市街地と郊外地で取組内容が異なることはやむを得ない。しかし、結果として計画書が非常に長く、読み進めるのがうんざりする計画だと思う。各地域で共通する課題は整理し、相違がある点については分かりやすく記載していただきたい。市内に住んでいる人にも郊外地の現状や特徴が分かるように具体的に書いていただきたい。資料全体を整理して共通する部分はまとめないと分かりやすい計画にならず、これを読んでパブリックコメントで意見を出すのは難しいのではと感じた。

(事務局)

市内全域で共通する課題は多くあり、その上で各地域の歴史や人、資源などの地域特性を生かし、各地域に合った取組で課題解決を着実に進めていこうという計画となっている。

ご指摘のとおり、対策には共通する部分があり、その上に地域の特徴ある取組が出てくると考えている。次期計画の検討の際には、さらに取組が進んでいくことも踏まえ、共通部分と地域独自の部分も含め、計画の組み立て方を検討していきたいと思う。

(C 委員)

72 ページの防災の部分について伺いたい。情報伝達手段の多重化に対応していくのは素晴らしい、情報伝達が最も大事だと思う。

例えば、避難指示があり避難所が開設された時、避難所へ自力で移動する方、家族に協力いただく方、隣近所の住民に連れてきてもらう方、他のコミュニティで助け合っていく方がいると思う。私の働く施設も福祉避難所としての契約を結んでいるが、重い障害を持つ方や寝たきりの方が福祉避難所に行く移動手段として車椅子、ストレッチャー等が考えられる。こういった専用車両でないと自宅から福祉避難所まで移動できない方がいると思うが、移動手段の確保等について、今の段階でマニュアル化されていれば教えていただきたい。

(幹事)

現行の福祉避難所への移動については、運用上では一旦避難所に来ていただき、避難所での生活が難しい方は福祉避難所に移動していただくことになっている。鶴岡市では、能登沖地震の際に福祉避難所が開設され、由良地区の方が搬送された事例がある。しかし、現実問題として多くの方を移送する場合、移送手段について課題がある。

(C 委員)

介護タクシーなどの車両とマンパワーを持っているのは市内の福祉事業所や施設だと思う。広域で避難指示が出された場合に備え、あらかじめ福祉事業所等と協定を結ぶことが必要だと思う。その点についてもう少し協議をされ、福祉事業所と協力体制を構築しておくことも必要かと思う。

(D 委員)

70 ページにあるアドバイザー職員制度、或いは県の総合的な地域づくり支援事業等々について。私が存じ上げている地域は、アドバイザー職員制度や交付金を活用し、先進的な取組を進めていた。自治会によって温度差があるが、地域の現状を伺うことを日常的な業務としているか伺いたい。

(事務局)

コミュニティ推進課には 10 名職員がおり、担当地区を数か所ずつ持ち、日頃から担当地区の取組や困りごとについて相談を受けている。地域、地区によって温度差があり、職員と頻繁に連絡を取っている地区は地域活動が進んでおり、いいアイデアが出ている。一方、中々進まない地区もあり、行政と地域が一緒に事業を考える取組になるよう運用していきたい。

(E 委員)

72 ページの避難情報の伝達手段の多重化について伺いたい。また、避難所の情報伝達の多重化に取り組んでいただけるか伺いたい。避難所では、聴覚障害を持った方は、音声情報だけでは聞き取れず、必要な情報を受け取れないことがあると聞いている。鶴岡市では以前、講演会の際に要約筆記や手話通訳をつけるというマニュアルを作成していた。避難所でも同様に、文字と音声による情報を発信するといったマニュアルを作成してもらいたい。

(幹事)

市では防災行政無線を整備しており、防災行政無線で情報伝達する体制を整えている。加えて市のホームページや SNS でも同様の情報も発信している。先日の地震でも市の LINE、X、Facebook に登録した方には、情報発信している。

現在は防災行政無線から出る音声情報を携帯電話、アプリを使って伝達するための実証実験を 2 か所で行っている。さらに情報伝達の手段を増やすために、多重化に取り組むことを記載した。

避難所からの情報は、避難した施設ごとに設けられた避難所運営委員会により、逐一、避難者に伝達される仕組みになる。

(事務局)

防災行政無線の内容は、スマホのアプリで繰り返し聞けるようになる。市からの重要な情報は、テキスト文字でも発信していきたい。鶴岡市で定めている避難所運営マニュアルでは、掲示情報コーナーを設け、文字で情報を貼り出すことを定めている。マニュアルの周知に努めていきたい。

(A 委員)

私の地区でも事業で参加者を集めると高齢者が多くなる。青少年事業を高齢者が考えてもマッチングしない。

私の地区では、コミセン改築のために様々な検討をしている。日常的に立ち寄れるようにミニ図書館を配置し、各地区で作成された冊子を置くなど、若い世代も立ち寄れる施設にしないと世代間交流はできないと思っている。

(事務局)

市には 33 のコミュニティセンターがあり、役員の方が苦勞しながら事業を行っている。コミセンの会議だけで利用するのではなく、子育て世代も日常的に立ち寄れる施設になれ

ばいいと思う。

地域の担い手として、若い世代が企画段階から参加することが重要だと思う。若い世代が集まり、地域活動ができている地区もあり、第二学区のまちづくり塾もそうだと思う。

また、専門部会を立ち上げ、あらゆる年代が計画段階から参加し、自分たちの事業として実施するという流れができている地区もある。

他にも若い世代の地域活動として消防団の取組もある。消防団は統率も取れており、地域で事業をすることが決まれば、活発な意見も出てくる。消防団も地域資源だと思う。

草刈りのねぎらいの場として飲み会を設ける地区もある。地域の若い世代の集まりを把握し、活用していくのも方法だと思う。

## (2) 各委員が属する団体・組織等の課題や取組について

### (委員長)

自治会に限らず、地域にある団体や住民が持っている共有財産について研究している。特に森林について研究しているが、森林、神社の土地、農地、水路など自治会で共有している場所や財産があると思う。森林は境界を明確にできないことや相続登記がされず権利者が不明になるなど、管理できないケースが発生している。森林に限らず、自治会、地域の人々が持っている共有財産の管理について課題や取組があれば教えていただきたい。

### (G 委員)

鶴岡市町内会連合会の副会長という立場で参加している。連合会では回覧板や町内会長の手引きという冊子も作成した。町内会長の手引きは、町内会長交代の引継ぎをスムーズにしていきたいという思いで作成した。また、各団体等から文書の配布・回覧の依頼があれば協力し、荘内大祭の大名行列には各町内の方に連絡をしているが、人員を派遣している。

私の住む町内会には公民館がなく、古くからあった神社を寄り合い場所としているが、登記簿がどこにあるか分からない。他にも財産的な課題はあるが、現在は若い世代に引き継がれている。しかし、この先どうなるか分からない。

他にコミュニティネットワークの活動がある。私の地区では町内会連合会、社会福祉協議会など組織を一本化している。一本化することで経費が節減され、限られた人材やものが有効に活用できたと 10 年を振り返って思う。

また、大学の花笠サークルや高校の社会福祉系の生徒とコラボして、コミセン事業や学区内の町内会でサークル活動を実施してもらっている。コミセンの団体だけでなく、他の団体にも声をかけてコミセン事業を行っている。

子どもとの交流が希薄になっているという話があったが、高齢者は働きかけなくても集まるが若い世代には声をかけにくい。小、中、高校生は積極的に働きかけないと事業に参加してもらえないと思っている。コロナ前は中学生がコミセン事業に作ったケーキを持参してくれたが、コロナ禍による中断や学校職員の働き方改革もあり、交流が少なくなっているところもあり、悩ましい。

### (H 委員)

東栄地区地域活動センターは、特に高齢者の方が生涯学習事業で利用している。輪投げ、グランドゴルフを楽しむ高齢者が少なくなり、若い世代に受け継がないか考えている。

令和 11 年度に藤島地区の 3 つの小学校、1 つの中学校が一緒になり、一貫校となる。地区の小学校では、持っていた畑等で様々な野菜を作り、収穫するという学習を行っていた。小学校が統合してなくなった場合、その畑や学校跡地をどう地域で守り、管理していくかが、これからの課題になる。学校校舎が取り壊しになれば、どう地域で活用するかについて、地

域住民と相談していかなければならない。

#### (C 委員)

コロナ禍で廃止となった学校運動会の代わりとして、11月に秋の大運動会を行った。天候や時期の問題もあり、アリーナでレクリエーションとして半日開催した。多世代交流の場として企画し、多くの方から参加いただいた。構想から約1年半を要したが、楽しかっただけでなく、やってみることが大事だと思った。自治振興会のメンバー、区長、多くの方の協力がなくてできなかった。

地区の生涯学習推進員の研修会で、Vamos Hirose(バモスひろせ)という団体呼んで活動報告してもらった。Vamos Hiroseという団体は、羽黒の広瀬地区を拠点とする20代のグループである。自然発生的に立ち上がった団体で、活動の場として広瀬地区の夏祭りの場を提供し、企画運営を任せた。開催したところ、若い世代の発想もあり、従前の夏祭りには来なかった若い世代が集まった。若い世代を取り込もうとしても反応が少ないが、Vamos Hiroseは小・中学校も一緒の同級生で構成されたグループだからか、活動の場とその機会がうまくマッチングした。今後も活動を続けていきたいとのことで、冬の行事の企画や、SNSを駆使しての情報発信、そしてホームページを立ち上げようとしている。チャンスやタイミングを提供するのが我々の役目だと思った。

山形県の人口も100万人を切っており、地区の中でも子どもが減ってきたと感じる。何ともならないが、何も企画しないより、企画をしたほうがいいと思っている。

作成した地域ビジョンの一文に「子どもたちが残る・戻ってきたいと思える魅力あるまち」とある。子どもたちが県外に出ても、祭りの時に帰って来なくなるようなふるさとを維持できる活動ができればいいと思っている。

私の地域は農村地帯なので、田、畑、大きな農業用のため池がある。ハザードマップもあるような大きなため池が1か所高台にあり、水漏れが始まっている。法面から少しずつ水が染み出ており、補修の必要があるが地権者が何人もいる。同じ集落の住民だけでなく、違う集落の住民もあり、一人一人に確認がとれない。ため池の応急処置はされたが工事の計画は進んでいない。

#### (D 委員)

若い世代に丸投げし、口は出さないスタンスでやっていくと、面白い企画ができると思った。

一昨日、ある神社の宮司との話で、祭りの夜の企画を完全に若い世代に任せたところ、騒音について苦情はあったが、全体的には好評で継続していく方向で考えているということだった。一方、自治体の規模、フェスティバルイベントの規模もあるが、若い世代がいない地域はどうアプローチしたらいいかと思う。

#### (E 委員)

地域の2つの保育園がなくなり、1つの保育園で活動するようになった。区長会を中心にして、学校や空き家をコワーキングスペースや会社として活用している他地域の事例を視察しているが、空いた保育園の活用方法についての話は出ていない。今後、活用方法について話が出てくればいいと思っている。

また、私が住む地域では、2日間ある祭りの1日目の夜の部は開催しないことになった。人口減少や手間の問題もあるが、この祭りをどう守っていくかが課題となってくる。

改善されたところでは、部活動の地域移行で中学校の吹奏楽部と地域の吹奏楽グループと一緒に活動し、文化祭に出演いただいたという取組があった。他にも、自分たちでサークルを立ち上げて活動したいという動きがある。社会教育活動に資するサークル活動で

あれば、施設利用が減免の対象になるため、それを利用して櫛引生涯学習センターをたくさんの方々に利用していただいている。一方、文化祭への参加率は年々減少しており、もっと積極的に周知しなければならないと考えている。

昨年度からの櫛引地域生涯学習センターの事業で、地域のイベント等で竹あかりを作る「櫛引に明かりをともしようプロジェクト」を行っている。また、櫛引地域の出身の30代の若い世代と中高生をマッチングして、職業の大変さを含め様々な話を聞く会を開催した。中高生が非常に忙しいため、参加者集めに苦労した。今後は、学校の総合的な学習にパッケージして、紹介できるようにしようという話になった。

地域には、既に活動している青年グループとして、NO-SIDE(ノーサイド)、くしびギン！があり、コラボレーションして、様々な活動に協力し合うという関係性を作ることを進めている。

#### (I 委員)

私の地域は雪問題と少子高齢化による過疎が課題となっている。独居や高齢世帯の除雪問題があり、隣近所の住民同士で助け合い、降雪時に除雪をする事業を行っている。朝日庁舎で行った地域支え合いアンケートで雪に困っているという声が多かったため、令和2年から開始した事業になる。今年6年目で少しずつその仕組みを改善しており、当初の利用は少なかったが、今では支援する人、支援を受ける人の組み合わせが14組になり、25の方が除雪支援を受けている。隣近所に気を使うより、支援事業を使って困りごとを解決しようということで始まった。

若い世代の地域づくりということで、チーム WaGeSho(ワゲショ)が注目を浴びている。今年は、笹巻きづくりの笹の葉採りのボランティアや、庁舎の近くの河原で以前のように芋煮会ができるように河川整備事業に取り組んだ。また、地域の入口にイルミネーションを作り、点灯する予定がある。笹の葉が不足していることを聞き、笹の葉採りのボランティアをしたが、今年は1600枚ほど収穫できた。笹巻きを作っている方に差し上げるとともに、そのうちの100枚で冬期間に笹巻きづくり教室をしようと思っている。

若い世代の夏祭りの話がもあったが、集落で20～25年ぐらい続く若い世代が主催する夏祭りがある。実行委員会形式で若者が一人につき1万円ずつ出資して開催しており、夏祭りを成功させることが目的で、脈々と続いているようだ。若い世代の中で受け継がれることで絆が深くなり、その夏祭りにチーム WaGeSho も参加した。学ぶところが多かったと思う。

中学校で地域語り合いという事業を3年開催した。大学のフィールドワークとして、地域で世代を超えた語り合いを求めている状況がマッチングし、ワークショップを開催した。地区にある全集落で開催し、高校生の声や高齢者の考えや想いを共有でき、良い機会となった。このワークショップは中学校でも開催し、大学、地域共創コーディネーターの方たちからも協力してもらいながら行っている。また、未来事業の支援を得て今年は7回スマホ教室を開催した。朝日地域の高校生、大学生がスマホの先生となって、集落のサロンやボランティア団体の集まりに出向き開催することができた。

#### (J 委員)

20名ほどの自治会で事業はもうマンネリ化している。今年2月に役員改選が控えており、定年延長や人手不足の課題がある。旅館業に従事する人に役員を頼むと夜に仕事が入っているなどで断られることもある。

また、令和8年度は集落に小学生は2人しかおらず、それ以降はいない。中学生、高校生を活用していきたいと思っている。中学校、高校を卒業すると地元には残らず20代はいない。30代も1人2人いるぐらい。何とか高齢の女性たちの集まりで毎月集まる団

体はある。他には若妻会もあるが、加入者の一番上は 60 代で組織をどうしようかと思っている。

単独で新しい事業は始めにくく、隣の少し大きい自治会と一緒に、事業を進めていく方向になるかと思う。

先日、自治会で防災訓練を行い各家庭にヘルメットを配布した。しかし、訓練には誰もヘルメットをかぶってこなかった。防災意識が薄れていると思うので来年は力を入れていきたい。

もう少し皆の意識を変えていかなければならないと思う。

#### (A委員)

私は町内会長を 2 年間務めた。当時の町内会では、消防団に 2 万円を支給していた。消防団がどんな活動をしているかも分からず、消防署に行き消防団員が何名いるか確認した。プライバシーに関わることなので名簿は見せてもらえなかったが、5 町内会で 5、6 人しかいなかった。以降、消防団への支給は止めている。

また、町内で実施された健康に関する講座の回覧文において、前会長から引継ぎがあったであろうとの判断で、了承なく私の名前が掲載されていたことがあった。大事な約束事やルールが住民間で欠如している場合があり、難しいと感じた。

#### (K委員)

町内会長になり 7 年経過した。町内のアパート住まいは 145 世帯で、それに対して持ち家が 141 世帯、町内の半分以上がアパート住まいとなっている。アパートに空きが出るとすぐに入居者が決まる。

小・中学校の子どもたちの数は平成 29 年には 95 名だったが、今年は 44 名になった。

アパートの入居者は町内会活動には参加しておらず、不動産屋さんから町内会費を振り込んでいただいている。小・中学校の子どもさんがいる家庭は、子ども会で町内会と関わりがあるが、そういったことがないと全然関わりがない。

#### (L委員)

「GO!GO!かみごうプロジェクト」は、上郷地区の課題を挙げ、解決するために始まった。メンバーを集める時は、若い世代の一本釣りとは郷地区にある 15 自治会からの推薦でワークショップを開催するところから始まった。

マルシェ、DIY の講座、e スポーツ事業を開催し、e スポーツの運営企画は中学生を中心として若い世代が行っている。e スポーツ事業は、スイッチという子どもたちが遊ぶゲームで、対戦形式の e スポーツ大会のこと。若い世代に丸投げせず、企画運営は任せるものの、かかる予算は振興会から支出している。企画運営の大変なところには、相談役としてコミセン職員が入っている。今年度の最後の活動は DIY で門松づくりを行う予定となっている。

地区で健康教室などの事業をやれば高齢者が多く、子ども向け事業を行えば高齢者が参加せず極端だと感じている。今年度は健康福祉まつりと文化祭を同日開催し、子どもたちと高齢者が一緒に参加できる機会になった。今後も世代間交流ができる場を大切にしていきたい。

私の地区も人口は減っているが、小学校には 70 名ぐらいの子どもたちがいる。学校運営協議会が設置され、コンセプトとして子どもたちが大人になった時に帰ってこれる居場所となるよう考えている。子どもたちに地元で愛着を持ってもらうことを考えて活動している。地域の方がゲストティーチャーとして子どもたちにふるさと、文化財について教えたり、農家の青年部も巻き込んで、子どもたちと活動する場も設けている。また、福祉学習とし

て高齢者を大事にしよう、逆に子どもたちを大事にしようとする機会を振興会で設けている。世代間交流を大事にし、子どもたちが大人になった時、地区に帰ってきたいと思えるように取り組んでいる。

(B 委員)

防災アドバイザーは会長がいるという組織でなく、防災士という資格を持った人たちが市から委任され、鶴岡市地域防災アドバイザーとして活動している。市議会議員も何名が含まれており、全体で 30 名の登録がある。災害の頻発化、激甚化に伴い、アドバイザーのスキルアップのために年間 4、5 回のブラッシュアップ講習会が開催されている。

また、各町内、各集落からの要請に基づき、防災サポート出前講座に派遣される。今年度は 30 件ほどの防災サポート出前講座の要請があったと聞いている。

直接的な防災アドバイザー事業ではないが、市民参加型の鶴岡市総合防災訓練が今年度湯田川地域を会場にして開催され、地域住民や関係者 350 人ほどが参加した。

一方、課題としては、1 点目に、地域防災計画の策定率が鶴岡市内全体で 30%と非常に低く、進捗率を上げるために努力が必要ではないかということ。2 点目に、市からスマホに情報を直接流す計画があることを伺ったが、災害発生時に流される防災行政無線が聞き取りにくいことがある。

(幹事)

防災アドバイザーの派遣関係は、市が事務局を持っており、市の方に登録していただく制度となっている。30 名ほど登録いただいており、地域で防災訓練をやりたい、地区の防災計画を作りたいといった場合に市に申請いただいて、アドバイザーを派遣する事業になる。地域の防災力の向上のために何かをしたいということであれば、防災安全課に相談いただきたい。

(B 委員)

観光ガイドも務めており、インバウンドの方をはじめ国内外の観光者に地域の自慢も含めて話をしている。鶴岡市は、ポテンシャルの非常に高いところで、給食発祥の地、農業電化を先駆けて行った土地だ。また、全国にある 1800 ある自治体の中で令和 3 年まで日本で唯一のユネスコの食文化創造都市だった。

食文化、羽黒山の精神文化、おもてなし文化の 3 つが融合した特異な地域で、330 年ほど前に、奥の細道紀行で来た松尾芭蕉が南谷で非常に手厚いおもてなしを受け、俳句において「有難や雪をかほらす南谷」の「有難や」に感謝の意を込めた。非常にポテンシャルの高い地域なので、職員の皆さんも自信を持って仕事をしていただきたい。

(3)第 3 期鶴岡市地域コミュニティ推進計画策定スケジュールについて

(事務局)資料 No.4を説明

(4)その他

特になし

4 その他

(挨拶:市民部長)

5 閉会(16時 35分)

(コミュニティ推進課長)